



「鎌倉の文化財、その価値と魅力～比較研究から見えたもの～」  
連続講座特別編

## やぐらの起源をさぐる

発行 平成 31 年 (2019) 3 月  
発行者 神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会  
事務局 〒 248-8686 鎌倉市御成町 18-10  
鎌倉市歴史まちづくり推進担当

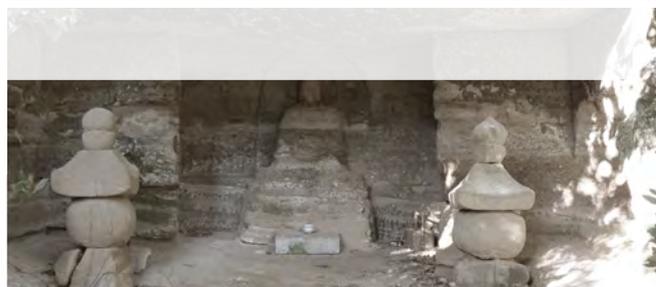
電話 0467-61-3849

※写真・本文等の無断転載は固くお断りします



「鎌倉の文化財、その価値と魅力～比較研究から見えたもの～」  
連続講座特別編

# やぐらの起源をさぐる





「鎌倉の文化財、その価値と魅力～比較研究から見えたもの～」  
連続講座特別編

## やぐらの起源をさぐる



こととしゅんいち  
講師：古田土 俊一 氏

浄光明寺執事・什宝物調査整理係、鶴見大学非常勤講師、NPO法人鎌倉考古学研究所 所員。博士（文化財学）。

中世鎌倉における都市論を石造物などの考古資料から研究されている。主な論文に「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」、「中世鎌倉のみちと造塔」、「鎌倉の中世石造物と建長寺開山塔」がある。

【表表紙の写真】（右上）大町釈迦堂口遺跡日月やぐら／（右中）大町釈迦堂口遺跡地蔵やぐら／（右下）東瓜ヶ谷やぐら群第3号窟／（左中）まんだら堂やぐら群／（左下）寛園寺境内の棟立井（以上 神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市（4 区市）世界遺産登録推進委員会）



まんだら堂やぐら群 (逗子市)

## はじめに

神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会では、「鎌倉」の世界文化遺産への再推薦・登録に向け、様々な取組を行っています。

平成 26 年度から 28 年度の 3 年間をかけ、新たなコンセプト構築に向けた土台作りとして、比較研究を中心とした基礎的な調査研究を実施しました。また、普及啓発活動の一環として、研究成果を報告する連続講座及び報告会を 7 回に渡り開催しました。

本書は、連続講座の特別編として、平成 30 年 3 月 31 日に鎌倉商工会議所で実施したもので、講師である古田土俊一氏のご研究の成果やご見解を中心に講演いただいた内容で構成されています。



写真1 講師を務める、古田土俊一氏

「やぐらの起源をさぐる」などと大風呂敷を広げてしまいましたが、鎌倉の山々に無数に空いている穴、鎌倉の方なら誰でも知っているであろう「やぐら」とはどのようなものなのか、謎に包まれた遺構の起源を探る、ということでお話をさせていただきたいと思います。

まず、やぐらについて考える前に、鎌倉の地形はどうやって形成されてきたのか、ということからお話いたします。

## 鎌倉の地形が作り出す特殊な状況

鎌倉は、三方を山に囲まれ南方を海に開くという要害の地として知られています。しかし、今から6,000年くらい前までは、いま私たちがいる、この鎌倉商工会議所近辺を含め、旧鎌倉地域全体は海だったということを頭に入れておいていただければと思います。その

後、地球全体が寒冷期に入り、南極の氷が大陸のように大きく出来上がると、海面が低くなって陸地が出てきます。これにより、鎌倉の平野部に人が住めるようになってきます。

図1が鎌倉時代の鎌倉の姿だと思ってください。住所でいうと材木座近辺になりますが、図1の真ん中辺りに水が溜まっています。一説によると、この辺りには波の影響を受けずに船が出入りして貿易ができる内海<sup>うちうみ</sup>があったそうです。この内海は現在では消失しておりますが、今でも少し掘削すればすぐに水が噴き出す、豊富な水分を蓄えている土地というのが鎌倉の地形の特徴です。発掘調査などをするとすぐに水が湧いてきて、水中ポンプで水を抜きながら調査しなければなりません。

余談にはなりますが、そうした状況は考古学上のメリットも生み出します。水分にパックされた木材は土壌による分解が行われにくく、さまざまな木材が埋蔵文化財として出土します。建築部材や生活の道具だけでなく、仏像や木簡といった文字情報までを多く得ることができるのが鎌倉の遺跡の特徴で、これはとても特殊な状況であると認識されています。こうした水分が豊富だという点を考慮に入れていただいたうえで、やぐらの話に移りたいと思います。まず、やぐらの基本的な情報からお話いたします。

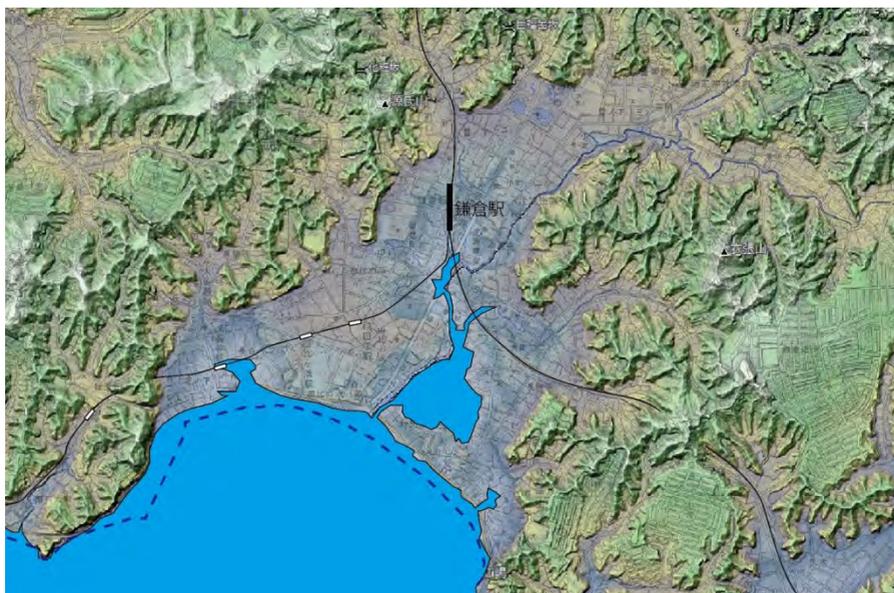


図1 鎌倉時代の鎌倉のかたち 内海があったと考えられている

## やぐらとは何か

やぐらとは、鎌倉を中心とした地域に分布する、横穴式の中世墳墓及び供養施設と考えられる遺構です。要はお墓、もしくはその供養のためのお堂のようなものと認識されています。

「やぐら」と書かれている一番古い史料は、江戸時代のものになります。『玉舟和尚鎌倉記』という史料です。『新編鎌倉志』が一番古いと書いている書籍や、徳川光圀の『鎌倉日記』が一番古いという論もありますが、『玉舟和尚鎌倉記』の方が古い史料です。

それによりますと、このお坊さんが鎌倉で書いた日記の中で、寿福寺のや

ぐらについてこのようなことを書いています。

「窟ノ内ニハ古へ画ヲカキタル跡アリ。故ニ絵書櫓ト云ナラハス也」(くつのうちにはいにしええをかきたるあとあり。ゆえにえかきやぐらといいならわすなり)

ここでは、物見櫓の「櫓」という字を使っていますが、これが「やぐら」という言葉の一番古い史料になります。語源については諸説ありますが、弓矢を入れていた倉だから「矢倉」という漢字が当てられるという話もあれば、「いわくら」という言葉が訛っていったとも言われていますが、統一見解はなく、実際のところは分かりません。

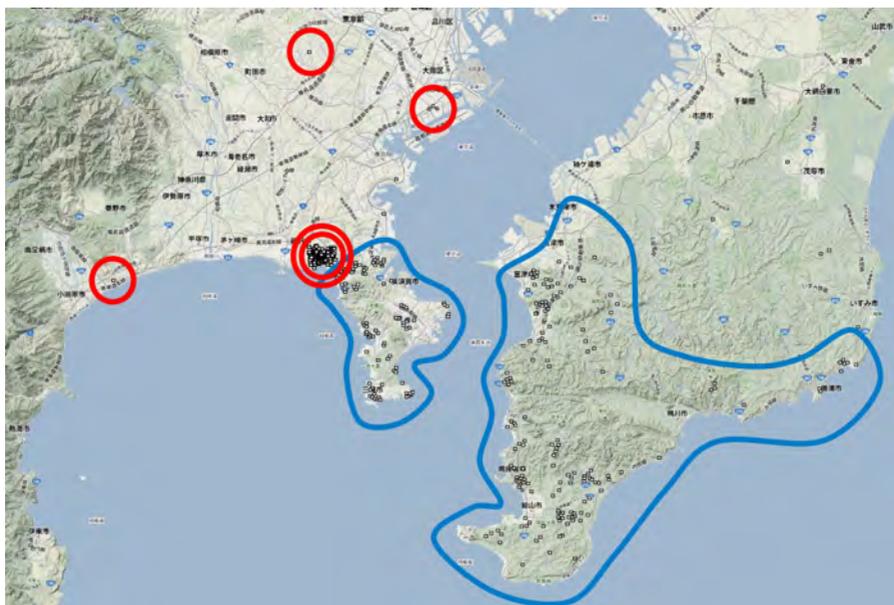


図2 南関東やぐら分布図(Googleマップ地形図を使用)

立地を見てみると、山の中腹の崖に成形し、そこに横穴（四角い穴）を開けて何百基も群集するところもあれば、一基だけのものもあるといった状況です。

分布は、だいたい南関東に集約されており、三浦半島に多く分布しています。その他に、千葉県の方にも分布しています。西の方は二宮町、北限は川崎市の麻生区辺りのようです（図2）。やはり極端に多く分布しているのは鎌倉で、分布図から見ると、鎌倉を中心にやぐらが発展し、広がっていったことが分かっていただけだと思います。

形態は、<sup>せんどう</sup>羨道があって<sup>げんしつ</sup>玄室という形で構成されていて（図3）、前庭部とい

う前の空間がある例もあります。横穴の形状は方形が基本で、長方形の例も多く見られます。

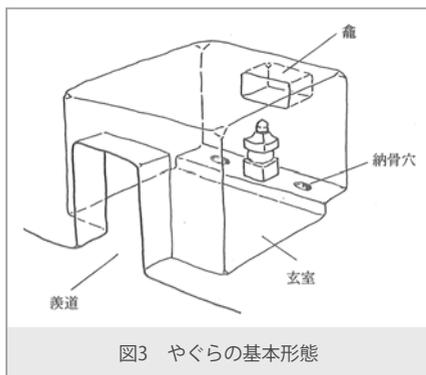


図3 やぐらの基本形態

# やぐらの歴史

ここで、考古学調査について少し考えてみたいと思います。地面というのは、平らに積み重なり、そこで時代がパックされます。ですから、ひとつの層ごとに地面を掘っていけば、そこで生活が営まれた時代以外の遺物は出てこないため、そこから出土する遺物から時代を判定することができます。しかし、やぐらの場合は、現代までずっと地面が出て開かれた状態でいたために、現代に至るまで手加えられてしまうことがあります。例えば、戦時中には防空壕にするために拡張されたり、現代であれば、横の壁を取り払って駐車スペースにしたりする例も見かけます。

このように、現代まで手加えられてしまうと、やぐら本来の形が分かりにくくなってしまいます。通常の考古学調査とは違って年代や本来の用途が分かりにくいという部分があるため、やぐらは現在でもあまり研究が進んでいないという実態があるのです。

一方で、地面に埋まっていたやぐらが偶然発見されて、発掘調査が行われたという事例もあります。そういった例を集めて遺物を比較してみると、やぐらの発生は13世紀後半、鎌倉時代の後半ごろで、15世紀の後半ごろまで続いたことが想定されています。

北条氏が滅亡して鎌倉時代が終わり室町時代になるわけですが、鎌倉には

「鎌倉府」という室町幕府の機関が置かれたため、鎌倉という都市自体は関東の中心であり続けます。さらに発展を続けたという話もあります。

鎌倉という都市が一挙に衰退して行くのが、だいたいこの15世紀の後半です。鎌倉府の長官、鎌倉公方かまくらくぼうが力を失い、茨城県の古河の方に追われて逃げて行きます。トップがいなくなった鎌倉という都市は、一気に衰退し、その様相は出土遺物の減少にも表れています。やぐらも、その時代にだいたい終わっていくということは、やぐらを必要とする人たちが居なくなったと言えるのかもしれませんが。

# やぐらの類例

話は変わりますが、全国のところどころ、例えば宮城県、福島県、山梨県、富山県、石川県、大分県などに、やぐらと思われる中世の遺構が見つかっており、やぐらの類例として報告されています。

例えば、宮城県の松島に行きますと、やぐらのような穴がたくさん空いております（p.8写真2）。近世まで手が加えられていたりしますので、発掘調査などは必要ですが、やぐらのようなものとして報告されています。こうしたものの源流は何なのか、昔からやぐらは人々の興味を引く遺構であり、研究が続けられています。



写真2 やぐらに類似している松島町雄島の遺構

起源として、龍門<sup>りゅうもん</sup>、敦煌<sup>とんこう</sup>やその辺りの中国石窟の文化が影響しているのではないが、こうした場所に見られる多数の岩窟<sup>がんくつ</sup>（写真3）がやぐらに繋がってくるのではないかと以前からよく言われています。この辺りのことをどのように研究していけばやぐらの源流が見えてくるのか、ここからは私の持論になります。お聞きいただければと思います。

## 蘭溪道隆の墓塔

写真4は、蘭溪道隆<sup>らんけいどうりゅう</sup>さんのお墓です。蘭溪道隆さんは、建長寺の開山でいらっしゃる鎌倉時代の高僧です。

蘭溪道隆さんは中国の四川省<sup>せいしよく</sup>西蜀<sup>せいしよく</sup>で生まれて、成都の大慈寺<sup>たいじじ</sup>で得度<sup>とくど</sup>されます。その後、日本人僧に誘われて日本にやってきました。そのまま鎌倉に来て、建長5年（1253年）、建長寺という本格的な中国風の禅宗寺院が出来上がり、その開山として招かれます。

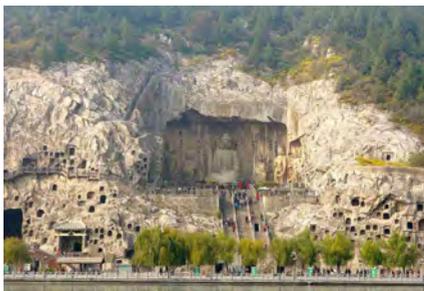


写真3 中国・洛陽にある龍門石窟

以前、この蘭溪道隆さんのお墓である「無縫塔<sup>むほうとう</sup>」を調査しました。無縫塔とは、お坊さんのお墓の一つとして特徴的な形です。頭の部分に縫い目がない、つまり悟っているような方しか使えないということで無縫塔と言います。このお墓は東日本で最も古い無縫塔です。日本で1番古い例は京都の泉涌寺<sup>せんにゆうじ</sup>の俊仍<sup>しゆんじよう</sup>さんという開山<sup>かいざん</sup>さんの墓塔<sup>ぼとう</sup>ですが、東日本ではこの建長寺開山塔<sup>かいざんとう</sup>が最古例となります。この無縫塔の造立年代を考古学的に調査させていただき、鎌倉でも特に古い時代に最先端の技術を使って造られていることを確認しました。

現在は建長寺で修業されるお坊様方の修行道場の上段の高台に祀られているのですが、もともとはその修行道場でもある昭堂<sup>しょうどう</sup>、開山堂の中にあっただのではないかという説もあり、私も賛成いたしました。

なぜこの塔のお話をしたのか説明します。この塔には非常に特徴的な格狭間<sup>こうせま</sup>という部分があります。格狭間とは

## 墓塔の文様で紐解く 蘭溪道隆と泉涌寺僧 との交流の歴史

写真5 (p.10)は、蘭溪道隆さんの墓塔の格狭間です。写真6 (p.10)は、覚園寺の歴代墓の中に一つだけ見つけた同じような文様の格狭間です。

蘭溪道隆さんのお墓の格狭間と覚園寺の格狭間を図面で重ねてみると、左側は全く一緒の大きさですが、右側は一寸(3cm)ほど、覚園寺のものの方が小さいことがわかります(図4)。

例えば西大寺関連の巨大な五輪塔などに見られることですが、師匠筋にあたる方のものよりも少しだけ小さく造るというルールを設けることがあります。この塔も、蘭溪道隆さんの塔より少しだけ小さく造っており、ルールが適用されているように見えます。

つまりこの塔は、蘭溪道隆さんと師匠と弟子の関係にあるような深い繋がりのある方の塔であると推測できます。どちらが正解なのか厳密には言えませんが、蘭溪道隆さんと非常に関わりの深い人物として、該当する人物を二人見つけることができました。

一人目は、樵谷惟僊さんです。どのような方なのかご説明いたします。

中国で蘭溪道隆さんと一緒に修行しており、京都の泉涌寺で第三世の長老になられた月翁智鏡さんという方がい



写真4 建長寺開山塔

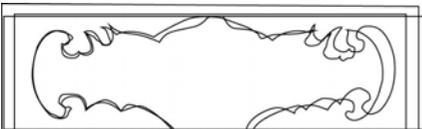


図4 格狭間の文様図

かえりばな ぎ  
反 花座と呼ばれる基礎の部分の文様のことです。仏教徒の方はご存知かと思いますが、大抵は、蓮の花を模したような文様が仏壇などに使われていたりします。一方、蘭溪道隆さんの墓塔にはコウモリのような文様(図4)が刻まれております。こういった例は日本にほとんどないくらい珍しいものでした。この類例を探したことがあったのですが、一つだけ見つけることができました。



写真5 建長寺開山塔の格狭間



写真6 覚園寺歴代塔の格狭間

ます。この月翁智鏡さんに誘われて、蘭溪道隆さんは日本にやって来ることになりました。

ところが、月翁智鏡さんは先に日本に帰ることになり、蘭溪道隆さんに「私の弟弟子をおいていくので、彼と一緒に日本にいらしてください。」とおっしゃいます。そして、弟弟子には「蘭溪道隆さんが日本に来るのをちゃんとエスコートするように」と言い残しているのですが、それを仰せつかった弟子こそが樵谷惟僊さんです。

この樵谷惟僊さんは長野県上田市で活躍した、塩田和尚という方と同一人物視されています。晩年まで蘭溪さんと交流が続いたことが知られており、上田市で大きなお寺を造り、そこに中国風の仏塔を造るということもしておられます。

二人目は、願行房憲静がんぎょうぼうけんじょうさんです。この方も泉涌寺のお坊さんです。

覚園寺の長老を務めた後に京都の泉涌寺で長老になるというシステムがこ

の時代に作られていくことから分かるように、覚園寺は泉涌寺派の中でも非常に格が高いお寺です。

願行房憲静さんも東日本に大きな影響を与えた方で、その方が覚園寺で供養されておりますので、この無縫塔がその供養塔なのではないかとも考えられます。覚園寺さんにある蘭溪道隆墓塔の格狭間に似た文様を持つ塔が、樵谷惟僊さんと願行房憲静さんのどちらのものなのかは、甲乙付け難いところです。

このように、蘭溪道隆さんは日本に来る時に京都の泉涌寺僧が関与して、交流が後まで続いていくということが分かっていただけだと思います。

## 偶然発見された 開山塔の地下遺構

その建長寺の開山塔についてですが、塔の下に埋まっているはずの御遺骨の場所が偶然発見された際の記録が

残されています。

こうしたお寺のお墓は、現在でも発掘調査をする機会がめったにないのですが、江戸時代でも神聖な出来事として伝えられています。この記録は漢文なのですが、元禄二年（1689）の史料を訳した建長寺研究員の館さんの訳によれば、次のようになります。

「本年（元禄二年）二月七日、今の塔階（開山堂か）は崖が迫り場所が狭かったので、土地を拓いて平らに造成した際、鋤が当たったところで偶然石卵がもたげ出したのが確認された。これは開山像の座下に埋葬されていたもので、盤陀石一枚をもって覆われていた。」

「塔身は石卵で底有り蓋有り。底の口径は二尺九寸五分（89.4cm）、高底の蓋は三尺六寸（109.1cm）で伊豆石を使い大変美しく造られている。また石灰にて蓋の縫目を一周する形で塞ぎ、容易には開かないようになっている。白鑽の餅がその中に奉られる。餅の高さは八寸（24.2cm）、横幅は七寸三分（22.1cm）であり、その造形は八稜（八角）である。中には五色の骨灰が盛られ、八分まで満たされて光り輝き混じり気のない様だった。」

このように細かい数字が記載されているため図面での復元を試みました。中には餅というものに入れられた八角形の容器がありその中にお骨が入っていたと記されています。

こういった事例が建長寺さんにはいくつもあります。もう一つ紹介させていただきますと、鎌倉時代に建長寺の住持をつとめた高峰顕日さんのお墓が、江戸時代に偶然発見されたという史料があります。

「宝暦五年（1755）五月十五日のこと、鋤の当たった「大磐二片」を開くと「坦平の封地」があり、「磐一片」を開くと「石槨」内に銘が記された霊骨器が納められていた。器は唐銅で形は卵に似る。横の周は一尺五寸（45.5cm）、縦の周囲は一尺七寸（51.5cm）。函蓋は真中に合わせて三本釘が打たれており、その中に香炉の形をした牡丹模様の霊骨器が有った。石槨は縦横二尺五寸（75.8cm）で、中央に一尺（30.3cm）の円空を設け、その器を奉り、地下窟は方五尺（151.5cm）で中央に石槨を安置する。方二尺五寸（75.8cm）、厚さ一尺四寸（42.4cm）の平らな石を蓋とする。また横二尺（60.6cm）厚さ一尺三寸（39.4cm）、長さ五尺（151.5cm）の二つの平らな石が、坦平なこの蓋である（『常寂塔記』。）」

そういったものを復元したのが（p.12 図5）です。左側が蘭溪道隆さんのお墓の地下遺構になります。史料によると、1メートルを超える大きな空間に八角形の霊骨器が納められていたと書かれています。

右側の高峰顕日さんのお墓はもっと大きく、人が入れるくらいの空間があ

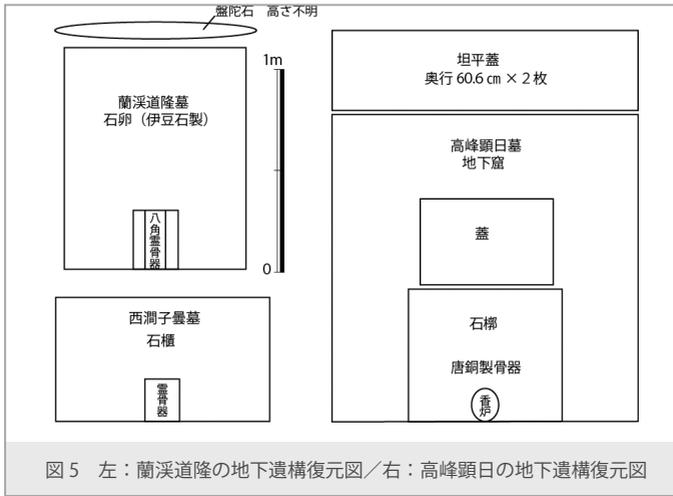


図5 左：蘭溪道隆の地下遺構復元図／右：高峰頭日の地下遺構復元図

り、中には石槨という石の入れ物の一つあります。その中に香炉があり、御遺骨が納められています。このような空間が禅僧墓の地下に存在する事例があるということが分かってきました。

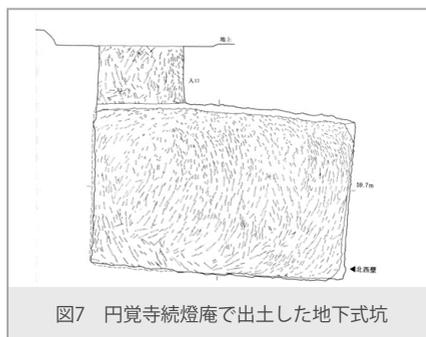
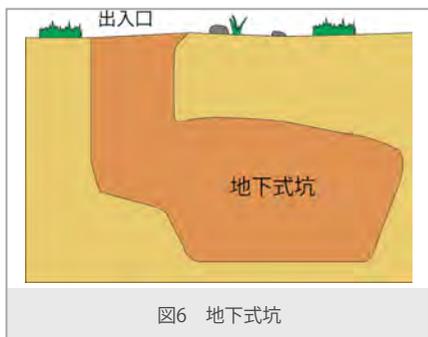
この漢文を訳した館さんもおっしゃっていますが、禅僧のお墓に地下空間があるという遺構は、中世の地下式坑（図6）に非常に似ていると思います。

## 地下式坑とは何か

地下式坑とは、要するに地下室のことです。竪坑によって地上と連結させた素掘りの地下室です。地下式坑の分布は甲信、南関東や琵琶湖周辺、九州北部に集中していて、南関東だけで5,496例あります。それくらい多く発見例のある遺構です。

機能としては、「墓」か「蔵」か、という説で二極化しています。その起源は、発掘調査によりますと14世紀に突如発生し、15世紀にブームがあり、16世紀半ばごろに栄え、17世紀まで続いた遺構であると認識されています。この遺構は、鎌倉には出土例がほとんどありません。

しかし、2例だけ地下式坑が円覚寺そくとうあん続燈庵で出土しています。この地下式坑は非常に古く、13世紀後半、つまり通説的に発生したと認識されているよりも前の時代に掘られているわけです。図7をご覧くださいと、地下に掘られた穴だということがよく分かります。13世紀後半というと、現状では日本最古の地下式坑です。続燈庵は円覚寺の一番奥にあります。横にあるおうばいん黄梅院は後世に造られたもので、この時代にはまだ存在しない塔頭です。そ



の点から、続燈庵の地下式坑は、円覚寺の境内の一番奥に掘られたものだといことが分かります（図8）。

地下式坑研究で注目されている、お墓説をとる方の史料としてよく取り上げられているのが、義堂周信ぎどうしゅうしんというお坊さんのお墓の作り方です。この方自身の日記に「私が亡くなる時にはこのようにお墓を造りなさい」と書いてあります。

「地を掘って穴倉を作り、石を切っ

て床に敷き、また龕がんの形に畦あぜに立てる。泥粉を塗ってその隙間を塞ぐ。これいわゆる墓穴なり。龕の中に椅子を立てて、結跏趺坐けつかふざにして座らせ、椅子の前に机を置き、机の上に筆すずりと硯すいびょうなど日常の道具を並べおく。龕の戸を鎖で封じ、鑰は折ってこれを捨てる。龕を穴倉に納めて覆うのには石蓋ひびを使って行ない、またその罅ひび（隙間）を粉で埋め、土で覆って深く埋め、石浮図（石塔）を立てて標識とする（『掩土之法』『空華日用工夫略集』。）



先ほどの蘭溪道隆さん、高峰顕日さんのお墓と通じるものがあると思います。

## 地下式坑と中国 仏舎利塔との繋がり

円覚寺続燈庵の発掘調査事例を踏まえますと、禅僧墓の地下遺構が地下式坑の起源になるか、もしくは地下式坑に繋がるものになるかと思えます。現在では発掘調査事例はありませんが、建長寺の蘭溪道隆さんの墓塔があった建長寺の開山堂の床下にも地下式坑が存在するかもしれません。

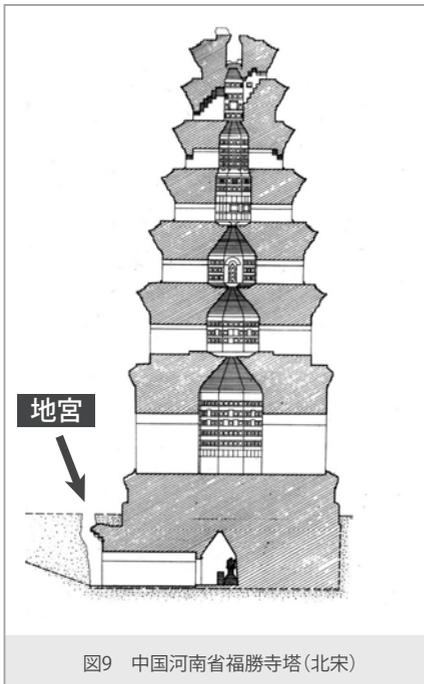


図9 中国河南省福勝寺塔(北宋)

もし存在するとすれば、それは日本の地下式坑の最古例になる可能性があります。地下空間に埋葬し地上に塔を建てるという行為が、蘭溪道隆さんのお墓には用いられたのかもしれませんが。この形と非常に似ている遺構が中国にあります。中国仏舎利塔、いわゆる仏塔の構造です。

1969年、中国の河北省で、工事中に仏塔の地下遺構が手付かずの状態で見つかった事例があります。

地上の塔の部分は残っていなかったため偶然の発見となったようですが、地下遺構は一辺2.2メートルの空間に仏舎利容器と夥しい莊嚴具が納められていたといい、写真が残されています。蓋石があり、それを開けますと、穴があります。その中に入ると地下空間が広がっていて、そこには多くの宝物が納められていました。

真ん中にある大きな石櫃の中に仏舎利が納められているという構造になります。この石櫃の形を覚えておいてください。北宋時代に造られた河南省の福勝寺の仏塔(図9)を参考にしますと、仏舎利塔の構造は、上に塔があり、その下には地下空間があつて仏舎利を納めるそうです。この空間を「地宮」と言います。地下宮殿の意味があります。

なぜこのような形になったかと言いますと、おおもとはインドのストウパにあるようです。この土饅頭のような形を見たことがある方もいらっしゃる

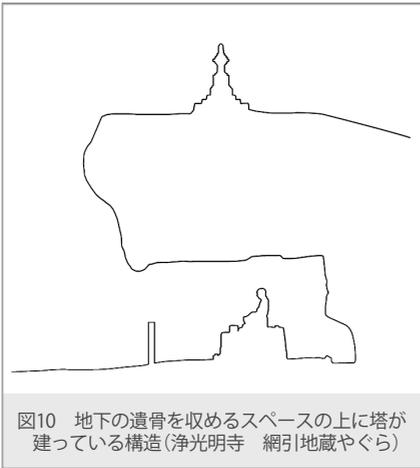


図10 地下の遺骨を収めるスペースの上に塔が建っている構造(浄光明寺 綱引地蔵やぐら)

るかもしれませんが、それが中国に渡り、中国伝統の楼阁建築と融合し、皇帝、王族クラスの墓制が用いられた結果、中国の仏舎利塔の形が成立したと見られています。

そうして丁重に収められた仏舎利ですが、一方で、徳の高い僧侶の遺骨も弟子たちにとっては仏舎利と変わらない大切なものであるため、仏舎利と似たような扱いを受けていきました。そういったことが連綿と続けられていくと、高僧の遺骨だけでなく僧侶のお墓には仏塔と同じような形を用いよう、という流れが出来てくると考えられています。

そうなりますと、上に大きな塔を建てるわけにもいきませんので、だんだんと小さくなって行って、石塔のようなものが出来上がっていくわけです。

そうした中国の僧侶の墓が常識と

なった時代に、蘭溪道隆さんが来日し、地下空間のあるお墓に遺骨が納められます。すると、そこから日本の地下式坑が発生するというのが一つの遺構成立の過程と見たいのですが、さらに私はこの流れの中からやぐらが発生していったのではないかと考えておりません。

地下に高僧の遺骨を納めて上に塔を建てると、仏舎利塔と同じような構造になります。この構造に非常に似ているのが図10です。やぐらの一つなのですが、上に塔が建っています。地下に遺骨を納める場所があって、そこに仏像が安置されています。これは、仏舎利塔の構造と違いはありません。また、こうした中国文化が、鎌倉に伝わっていることを証明する資料が、先ほど覚えておいてくださいと申し上げた地宮内の宝物にあった、仏舎利を入れる石櫃です。これは中国の伝統的な形ですが、鎌倉にも現存します。

## 覚園寺で見つかった地下遺構

場所は、覚園寺です。その昔、覚園寺で出土し、中には五銚杵ごせしよと一緒に遺骨が納められていました (p.16 写真7)。この容器が、どれだけ中国の形を踏襲しているかと申しますと、このように上の隅を切った四角い石櫃が中国で数多く出土しています (p.16 図11)。



写真7 覚園寺蔵 平等寺跡出土石櫃

中国の出土例には銘文もありまして、隋の国の皇帝が舎利塔を造った時の容器だと分かるのですが、この時に形状が定まり、踏襲されていくのです。中国の舎利容器の伝統が鎌倉にも伝わっていたことを示す貴重な資料です。

さて、その覚園寺では建長寺の開山塔と良く似た無縫塔があり、建長寺の方には地下遺構が存在することまで分かりました。それならば、覚園寺でも地下遺構があるのではないかと考えたのが、次の検討です。

現在、建長寺は禅宗、覚園寺は真言宗です。ただ、これは現代での分け方であって、鎌倉時代は新しく入ってきた宋代仏教の諸宗兼学しよしゅうけんがくの学風によって多くの寺院と僧侶が交流し、学び合う時代でもあったのです。だからこそ泉涌寺の僧侶が蘭溪道隆さんを日本に連れてくるのです。



図11 山東平陰隋舍利石函(左)と函銘文拓本(右)

蘭溪道隆の墓塔と地下遺構の関係が、覚園寺の墓塔にも踏襲されていたのではないかと仮説を立て地下遺構を探索した結果、行きついたのは一つの井戸でした。

薬師堂ヶ谷やくしどうがやつには覚園寺の薬師堂やくしどうがあります。一般の方は入れませんが、奥に歴代住職の墓地があり、そこに類例となる塔があります。そしてご本尊が祀られる薬師堂の後ろ、歴代住職の墓地の手前になぜか一基の井戸があり、以前からその立地に不自然さを感じておりましたむねたてのい（図12）。この井戸を棟立井と言います（写真8）。

## 棟立井はどうやって出来たのか

水が滞留して水質が悪い鎌倉の土地で、比較的良質な水を出す井戸が10基



図12 寛園寺境内(Googleマップ地形図を使用)

あり、鎌倉十井と呼ばれています。鎌倉十井は、江戸時代に地誌によって紹介され、広く知られるようになりました。

そのうちの一つに棟立井があります。棟立井のことを一番古く記した史料が、徳川光圀が書いた『鎌倉日記』で、1674年のものです。

「山根二ハフムネノ井アリ」(やまねに はふむねの いあり)と書かれています。江戸時代のはじめのころの史料ですが、このころには既に有名だったということが分かります。井戸が造られた、もしくは知られるようになったのは、江戸時代のはじめよりもっと前だったことは想像に難くないでしょう。

例えばこれが地下遺構だとして、どうなっていけば井戸になるか考えていきたいと思います。塔と地下遺構が造営されます。後世に、墓塔を別の場所に移動したことは寛園寺の絵図から明らか

かです。そこに地下遺構があることを知らないお寺の方々が、たくさん増えた墓塔を整理し直す機会がありました。墓塔が移動した後、誰にも知られずに残された地下遺構が、地すべりなど何らかのきっかけにより偶然発見されたとします。

ここで冒頭の鎌倉の地形形成の話を出してほしいのですが、鎌倉は湧き水が非常に多いという土地柄です。これを考慮しますと、谷戸の奥という特に山水の溜まりやすい立地に地下空間を掘ったとしたら、内部の空間にはすぐに水が溜まってしまう可能性が高いのではないのでしょうか。水が溜まった穴が偶然顔を出したとしたら、それを人々は井戸だと認識するのではないのでしょうか。

なぜ屋根のようなものが必要なのか、他に同様の例を見たことがありませんので、この井戸が普通の井戸ではないことは確かです。

当時、建長寺の禅僧墓のように地下



写真8 寛園寺の棟立井(むねたてのい)

遺構を造ることが鎌倉で流行の兆しを見せた、つまり、皆が真似しようとした時に、谷戸の中にお寺を造るという鎌倉の構造上、地下遺構が土地柄に合わないことは、一、二例造れば分かると思います。そうするとこの地下遺構をもう少し水捌けの良い高い所に造ってはどうかと私なら考えます。

上に塔が建っていて、その下に穴があり、その真下に遺骨などを納めることができれば、それは舍利塔の形として意味は通じます。谷戸のさらに奥となる背後の山の山頂や斜面を利用し、塔と穴を設置する、そのようなことを

行ったとしたら、それがやぐらというものに繋がっていくと考えています。

また、鎌倉に地下式坑が発見されないというのは、造らなかったのではなくて、造れなかったのではないのでしょうか。南関東には5,000例もあるのに鎌倉にはほとんどありません。しかし、一番古いと考えられる地下式坑が鎌倉にあるというのは、それを示しているのではないかと思います。屋根形についても、中国の舍利塔の地下遺構を見ますと、似たような形が幾つもあります。

中国では生きていた時がいちばん楽しいという儒教の考え方があります。よって亡くなった後も生きてるときと同じような生活をさせてあげたいと思うようです。

そのため、地下にあるお墓にも家のようなものを造り、屋根も掛けてあげます(図13、図14)。中国の皇帝のお墓がその最たる例で、地下に宮殿を造ることを行います。そうすると地下宮殿のようなもの、屋根状のものがお墓に用いられるわけですが、そこから派生した中国仏舎利塔の地下構造の形が、やはり屋根を造っていて、それがもしかしたら日本に伝わったのかもしれない。

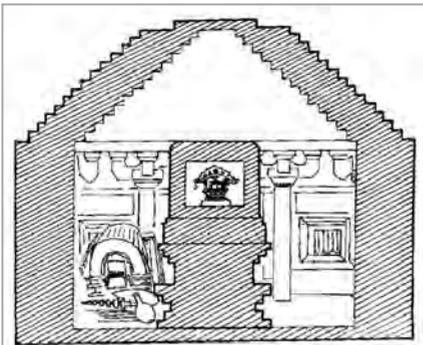


図13 臨猗双塔寺塔地宮

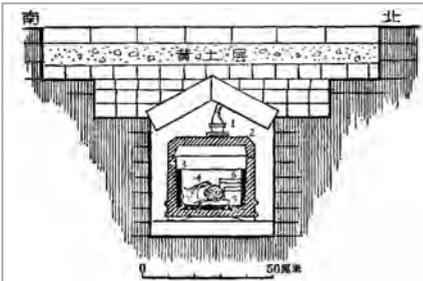


図14 上海興聖教寺塔地宮

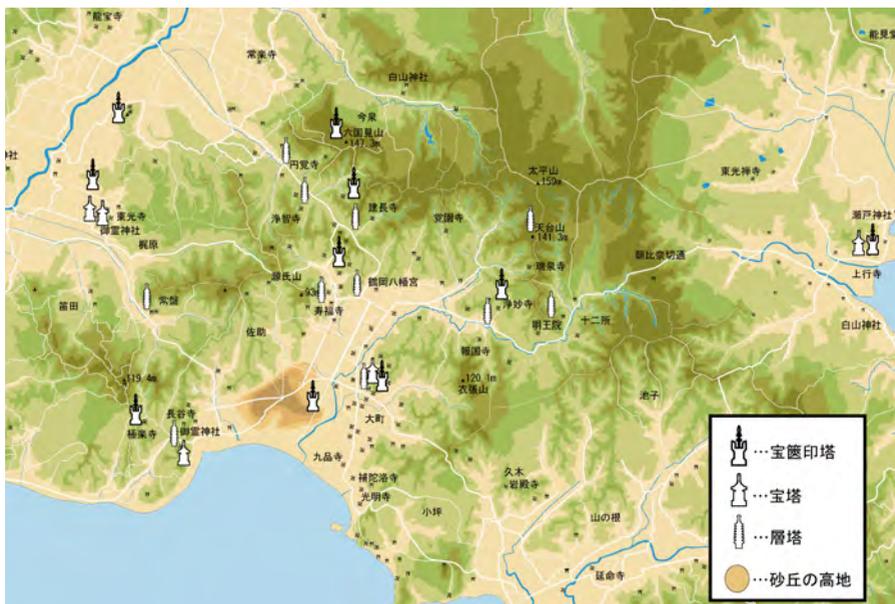


図15 中世鎌倉認識範囲内の大型石塔位置図

## 鎌倉の山の上に大型の石塔がある理由

では、鎌倉の山には塔が建っているのかという疑問があるかと思いますが、その点も解消できています。

鎌倉では鎌倉時代の後半から、石塔が造られるようになるのですが、本来、大型の宝篋印塔は山の頂上に置きまして、その見える場所に功德があるという意味があります。

現在まで残る大型の石塔のうち、特に宝篋印塔の位置をみますと、だいたい山稜の麓、もしくは高いところ、山の上にあることに気が付きます。この塔でしたら本来山の上にあっても良いの

ではないかと考えています。

山の頂上に塔があって、それが舍利塔になって、その斜面を掘削して横穴を掘る。山の斜面にやぐらが群集するようになったとしても、頂上に塔があれば、それは塔下と言えるのではないのでしょうか。

鎌倉時代の鎌倉の範囲というのは現在の市域以上に広く認識されておりました。大型の石塔は、その全てが範囲の内に収まります。特に旧市域外の塔の多くは現在でも山の上にあたります(図15)。

山の上にある塔は、それが見えたら鎌倉の入口だというランドマークになると共に、塔が見えるところに功德が

ありますから、人々は設置者に感謝し、畏敬の念を抱く構図が想像できます。

どこから入っても塔が見えるという都市が鎌倉であり、そこにやぐらができることに、不都合はありません。例えば名越口から入りますと目の前に山が見えます（写真9）。こういった目印になる山をアテ山といいます、その頂上に塔が建っているのが中世の鎌倉の風景です。

写真10は安養院の塔ですが、修理報告ですでに、本来の位置でないことが指摘されておりますので、もしかしたら地震などで崩れて、危ないから山の塔を下に降ろすといったことがあったかもしれません。

以上、やぐらの起源として一つの説を提示させていただきましたが、一方で、以前より指摘のある中国石窟の影響した可能性についても少しばかり述べさせていただきます。可

能性はあると考えています。

## 中国の石窟が及ぼした影響

敦煌や龍門といった石窟が影響した可能性は十分にあると思います。但し、これら中国の石窟は、寺院である点に注意しなければいけないと思います。

例えば、この龍門や敦煌は、扉がついて柵がついていることから想像できるように、ここで修行をして共同生活を送っている人たちがいた、岩窟を利用した寺院です（写真11）。

それに対して、鎌倉のやぐらは大体がお墓だと考えられています。その点で、寺院であった中国の石窟と単純に比較して良いものかという疑問があります。そこで注目したいのが、石窟寺院の僧侶のお墓である瘞窟・瘞穴いくつ いけつです。石窟に造作された埋葬遺構はやぐらの性



写真9 名越口から見えるアテ山



写真10 安養院の宝篋印塔

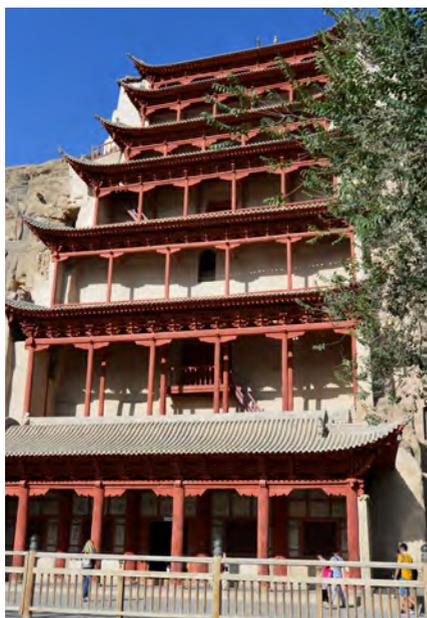


写真11 敦煌・莫高窟

格や構造を比較する上で重要な遺構だと思います。

ただ、そもそも敦煌や龍門という日本から遠く離れた場所に実際に行った日本人僧はいたのか、そこから来た中国僧はいたのか、という点を証明する史料はなかなかありません。何百人という僧侶を一人ひとり調べる必要があります。その中で可能性があると思ったのは、四川省という場所で「崖墓<sup>がいぼ</sup>」という崖面に掘られているお墓です。その点に注目してみたいと思います。

四川崖墓は、四川省を中心に南の貴州省や重慶あたりにも広がっているのですが、鎌倉時代、四川でお坊さんになった方々は修行のため、当時の一大



写真12 中国の崖墓

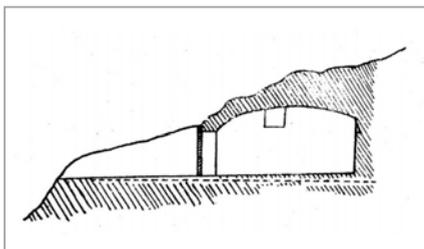


図16 崖墓の断面図

拠点である杭州や寧波<sup>ニンポー</sup>の辺りに集まっていました。

この崖墓というものは、石窟寺院ではなくお墓です。崖面にいくつも穴が空いている姿は（写真12）、やはりやぐらと似ていると感じます。

この崖墓を断面図（図16）で示しますと、前庭部・羨道・玄室がある構造で似ていると言っても良いかと思えます。漢代という非常に古い時代から存在するものですからやぐらと直結させるには抵抗がありますが、初期の何十室も有する大規模な例から徐々に縮小されていって後には一穴だけの小さな例も出来上がるようです。これが宋・明代まで造られていたという話もありま

すので、その岩窟の造営や群集する風景を見た四川僧は多かったのではないかと思います。

## 四川僧と日本の繋がり

最後に四川僧と日本との繋がりをみていきます。

鎌倉が最も繁栄し、やぐらをはじめ多くの文化が導入された13世紀後半という時代、中国では仏教をさらに学びたいと願う僧侶が各地から南宋五山のある杭州や寧波へと集まっていました。そこへは同様の目的で東の海を越えた日本人僧もやってきたわけですが、西の最果てから遠い道のりを越えてやってきていたのが四川僧でした。

この日本人僧と四川僧はお互い遠いところからやって来て、ストイックさに通じるところがあったとも言われますが、交流があったというエピソードが幾つも残されています。

そういったところで当時の南宋五山の住持、トップの方は全て四川僧だった時期もあるほど四川省の僧侶が杭州・寧波の辺りを席卷していた時期がごぞいます。日本人僧が多く中国を訪れていたのもこの時期でした。

日本から宋に渡り、南宋五山のトップの方の側仕えになるまで出世した円爾えんという方がいます。この方は、後に京

都の東福寺という大寺院を造りました。非常に優秀で、五山のトップの方に見初められ、四川僧に教えを受けたのですが、京都の東福寺にやぐらはありません。また当時多くの入宋僧が出入りした京都全体を見ても、やぐらは存在しておりません。

つまり、やぐらは京都を經由せず、中国から鎌倉へ直接輸入された文化によって成立したと考えるべきだと思います。

僧侶を媒介者とする中世文化の伝播とは、中国から帰ってきた僧侶が京都に文化を伝え、そこから鎌倉などへ拡散されるといった構図が多いのですが、やぐら文化の場合はそれとは異なる状況によってもたらされたこととなります。これは、例えば中国の僧侶が鎌倉に直接やってきて長期間滞在し、住持の様な立場で指導を行うといったことが想定できます。

特に指導的立場で招かれた中国人僧ならば、仏教的な話として地下空間のある僧侶の墓葬を伝えたでしょうし、それ以外に中国の伝統文化の一種として崖につくるお墓の話も伝えた可能性もあると思うのです。この崖の墓の源流が敦煌や龍門だと関係する僧侶の特定は困難なのですが、四川の崖墓でしたら該当者がおります。

その人物は中国人僧侶で、四川で生を受けました。四川で生活を送っていたならば、崖墓を目にする機会もあつ

たことでしょう。成都で得度し、のちに故郷から遠く離れた寧波での修業中に日本人僧と交流し、日本へとやってきます。そして京都に長期滞在せず、鎌倉に入り、長い期間を大寺院の住持として過ごしました。それが蘭溪道隆というお坊さんです（写真13）。

といったところでようやく全ての話が繋がったように思います。まとめると、鎌倉のやぐらという文化の発生には、中国の仏塔やそこから派生した僧侶の墓、または崖墓の様な石窟遺構など様々な要素が関係していると考えられます。それらが鎌倉という土地で、地形などの影響を受けつつ融合し、適合していった結果がやぐらという遺構なのではないかと考えます。もちろん蘭溪さん以外にも鎌倉にやって来た中国人僧はたくさんおりますので、これか



写真13 蘭溪道隆像

らも検討は必要ですが、謎に包まれたやぐらの起源と、その文化の発生に関わった人たちについて私の考えを述べさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

## 出典

### 表紙裏

まんだら堂やぐら群：逗子市  
古田土俊一氏：神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市（4 区市）  
世界遺産登録推進委員会  
写真1：4 区市世界遺産登録推進委員会  
写真2：同上  
写真3：同上  
写真4：古田土氏  
写真5：同上  
写真6：同上  
写真7：4 区市世界遺産登録推進委員会  
写真8：同上  
写真9：古田土氏  
写真10：同上  
写真11：4 区市世界遺産登録推進委員会  
写真12：范小平『四川崖墓芸術』2006

写真13：鎌倉市教育委員会（所蔵：建長寺）  
図1：古田土氏（カシミール3D 使用）  
図2：古田土氏（Google マップ地形図使用）  
図3：横須賀考古学会「三浦半島考古学事典」2009  
図4：古田土氏  
図5：同上  
図6：同上  
図7：続燈庵境内遺跡発掘調査団「円覚寺続燈庵一埋蔵文化財発掘調査報告書」1990  
図8：4 区市世界遺産登録推進委員会（Google マップ地形図使用（C）2019 Google, ZENRIN）  
図9：河南省古代建築保護研究所ほか「河南鄧州市福勝寺

塔地宮」1991/『文物』1991年6期（一部加筆）  
図10：古田土氏（鎌倉市作成図を元に作成）  
図11：邱玉鼎・楊書杰「山東平陰發現大隋皇帝舍利宝塔石函」1986/『考古』1986年第4期  
図12：4 区市世界遺産登録推進委員会（Google マップ地形図使用（C）2019 Google, ZENRIN）  
図13：乔正安「山西臨猗双塔寺北宋塔基地宮清理簡報」1997/『文物』1997年第3期  
図14：上海博物館「上海市松江群興聖教寺塔地宮發掘簡報」1983/『考古』1983年12期  
図15：古田土氏  
図16：『四川崖墓芸術』